



春夏秋冬

2018
vol.13
季刊発行

eco 情報



「太陽光発電システム」

3.11大震災の後、売電価格が買値の倍以上で10年保証で儲かるということで、一時期もてはやされましたが、今は如何でしょうか。
売電価格は下がりましたが、設置価格も6年前に比べると2分の1に下がっています、性能も上がりましたので7~8年で設置費用を取り戻せるというのは変わらないのです。一番大切なことは屋根に設置したときに影にならず太陽の光を十分に受け取れる立地条件かということです。都会では難しいかもしれません。

ワンジャ 王家 サイカン 菜館

中田家の嫁、王さんが教える中国の家庭料理。ぜひ試してください。



file No.013「棗とクコのワイン漬け」



材料 (500ml容器分)

- 棗 …………… 40g
- クコ …………… 20g
- 赤ワイン …… 300ml

作り方 保存瓶に棗、クコ、赤ワインを注ぎ、漬ける。
ヨーグルトなどにかけて食べてください。

<効能> 棗はビタミンB5を多く含み冷え性の緩和に役立ちます。
クコは血圧低下作用、抗脂肪作用があります。
暑い夏を乗り切ってください。



書籍紹介

『家康、江戸を建てる』

江戸幕府を開いた徳川家康というと、タヌキおやじで軍略家の部分がクローズアップされていますが、門井慶喜著『家康、江戸を建てる』によると家康が、いかに江戸を住みやすくするために、配慮したかが手に取るようにわかる一冊。

まず取り組んだのは、坂東太郎といわれた利根川の氾濫を防ぐために川の流れを変え。これにより耕地面積が増え安定した食料計画が描けるようになった。

そして銭造り。国家の根幹をなす貨幣を上方から独立するために江戸に持ってきた。

次に飲み水、江戸の人口が爆発的に増えたため飲み水が足りない、井戸を掘るには海が近すぎた。多摩から人力で上質の水を江戸へ。

そして最後の仕上げが江戸城を造る石垣造りとなる。

すべてが長いスパンを必要とし武士ではない専門職が必要な事業。これらの事業の数々を思うと、いろいろなことに、まだまだ頑張らなくてはいけないと思わしてくれた一冊でした。

夏の体感フェア開催

小山建設は夏涼しく冬温かい外断熱・二重通気工法「ソーラーサーキット」をおすすめしています！

日時：平成30年7月28日(土) 午後1時より
29日(日) 午後1時より

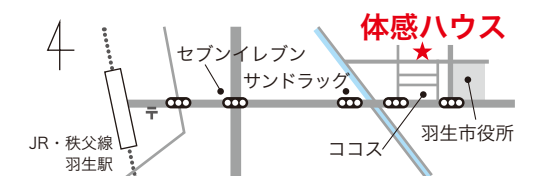
会場：当社体感ハウス

住まいと健康に関心のある方
お待ちしております。

体にやさしい
薬膳教室
同時開催



※写真はイメージです



羽生市東6-5-13 ☎048-563-1123

三代目通信

ゼミに卒業制作、バイト、
それに加えて企業説明会、就職面接の日々。
いくつかの企業で落とされへこんだり

内定をもらっても悩んだり、夏休みはゼミ合宿も待っている。

残り僅かの学生生活！

ソーラーサーキットの家



発行：有限会社 小山建設
羽生市中央2-6-3
☎048-561-6878
info@e-hous.co.jp
編集長：中田 新一

●web もご覧下さい
<http://www.e-hous.co.jp/>

report 中国建築

いつもは小山建設で建てられた住まいを訪問し、今の住み心地等をご紹介しますコーナーですが、今回は「中国建築」をご紹介します。

「中国建築」



写真左：杭州 靈隱寺の五百羅漢 写真右：大雁塔

中国が世界で一番輝いていた唐の時代、日本では聖徳太子の時代。中国から仏教を通じて多くの文化が入って来ました。

西遊記で有名な三蔵法師は、インドへ修行の旅へ出て、たくさんの経典を唐の都長安に持ち帰り経典の翻訳作業を行った大雁塔、空海が遣唐使として修業した青龍寺、インド仏僧で中国禅宗の開祖、達磨大師、日本へ仏教を広めるために苦難の末にた

どり着いた鑑真和尚が開いた唐招提寺、空海と同時代に唐に渡った最澄は比叡山延暦寺を開いた。

仏教を通じて寺院建築は、日本の建築に多大な影響を与えた。

五重の塔、七重の塔に観る高層建築の構造、屋根を覆く瓦を製造する技術、建物を装飾する漆の技法。

中国の寺院や城壁の建物を観ると日本と違って石を多用している。これらを観ても、中国の様式が日本に直輸入されたのではなく、日本の気候風土と身近な材料を工夫した跡が見いだせます。

1000年以上たった現在になっても寺院建築が変わらないのは、すでに最高の技術を持って建てられ、今になっても変えることのできないほどのレベルを持っていたからではないでしょうか。

古の文化に感謝です。



写真左：靈隱寺の達磨大師 写真右：靈隱寺の十三重塔



写真左：長安の城壁 写真右：青龍寺の正門

匠

の仲間たち

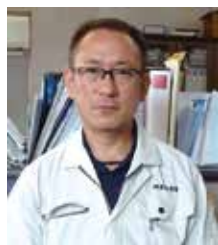
わたしたちがいつもお世話になっている心強い匠たちをご紹介しますコーナーです。

file no.013

有限会社 長峯設備
長峯宣幸さん

PROFILE

生まれ：昭和41年
出身：羽生市



父は東京で修業し開業、縁があって40年前に羽生で開業する。

弟が設備の専門学校で勉強し設備会社に修業に入ったので、私は継ぐつもりもなく文系の大学を出て営業の仕事に就いた。そんな中、父が体調を崩したため、やむなく家へ帰る羽目に。

専門外の私を会社の先輩が厳しく仕込んでくれ、弟と二人三脚で今までやってきた。最近の悩みは若手の職人不足。

地元・羽生市での取り組み

「健康と住まい」セミナー開催

今年2月に東京ビックサイトで開催された「住まいの耐震博覧会」に続き第二弾のイベントとして市民プラザで開催した「健康と住まい」セミナー。

講師は、大阪医科大学教授の石川智久理学博士と住環境アドバイザーの松岡在丸氏。

松岡先生は平均寿命と健康寿命の差は10年、この10年をいかに快適に過ごすか。日本では浴室で年間17,000人が命を失っている、欧米では浴室に暖房が入っているのが一般で、この一つだけとっても、家が原因で病気



になってしまうとのこと。100年前、家の中での夏の死亡が多かったのは衛生上の問題が多かったから、それが解決した現在、冬の低温が原因で年間12万人が家の中で亡くなっている。寝室の布団の中が温かくても室温が低いと、冷たい空気を口から吸いこむため喘息が発症しやすくなる。アメリカでは州によって室温が定められているとのこと。今何が出来るかというと、寝室とトイレ、浴室を結ぶ生活カテゴリーだけでも断熱改修をして冬場の死亡事故を減らすべきだと、具体的には室温を18℃に保つことで健康になれると締めくくった。

石川先生はドイツ、アメリカの大学で研究員生活を送り日本に戻ってからも大阪大学、東京工業大学で教授を務め、民間の理化学研究所、ファイザー製薬で部長を務めるなど華麗な経歴に似合わない、ざっくばらんな方で、森鷗外は軍医の責任者でありながら、脚気の原因が白米にあり麦飯に変えなかったことで戦争中脚気が原因で死亡者が増えたから1000円札の紙面を夏目漱石に取られたんだと、笑い声が起きるほど皆にわかりやすい講話の内容でした。



そしてこれからは故郷の愛媛に帰って地域活性化のために世界に向かって愛媛を発信しゲストハウスを造って、もてなすという楽しい未来が待っているという話で締めくくっていただきました。お二人に話は私たちの生活にも密着した有意義な時間でした。